

ヴォワチュールによるロングヴィル公爵夫人と大コンデ

田 島 俊 郎

La duchesse de Longueville et le Grand Condé vus par Voiture

Toshiro TAJIMA

Résumé

Dans des lettres et des poésies de Vincent Voiture, nous rencontrons souvent la jeune mademoiselle de Bourbon et le jeune duc d'Enghien. Ils sont les enfants de la princesse de Condé qui fréquente l'Hôtel de Rambouillet. Voiture parle, dans ses lettres et poésies, surtout de mademoiselle de Bourbon. A travers ces lettres et poésies, nous la connaissons comme une jeune demoiselle qui s'amuse avec ses amies: mademoiselle de Rambouillet et mademoiselle Paulet entre autres.

D'ailleurs, Nous connaissons le Grand Condé et Madame de Longueville comme des personnages importants de l'Histoire politique et sociale du 17e siècle. Le Grand Condé était un génie militaire de l'époque. Et tous deux étaient les acteurs principaux de la Fronde.

Mademoiselle de Bourbon et le duc d'Enghien que Voiture connaissait bien deviendront la duchesse de Longueville et le Grand Condé. Dans ce mémoire, nous voulons montrer la jeunesse de ces frères nobles vus et racontés par Voiture.

ヴォワチュールの書簡は往々にして退屈である。ヴォワチュールは、我々には空疎とも思えるような言葉で相手の不在や遠さを嘆く。我々が他人の書簡を覗き見するときに期待する秘められた感情の発露などは見られない。ヴォワチュールにとって、手紙は自己の内面表現などではない。手紙は相手を喜ばせる手段であり、そのために技巧が凝らされる。我々がヴォワチュールの書簡に期待できるもの、そして多分ヴォワチュールの同時代人たちが期待していたものは、なまの感情の重さよりも、もともと重みのない感情をさらに軽く見せかけ

るために駆使される陰喩や誇張といった修辞であり、諧謔の軽さである。

量こそ多くはないが修辞を凝らした書簡を受け取った相手に、ランブイエ邸で最も高貴な常連であったコンデ大公夫人とその子供たちがいる。コンデ大公家の長女のブルボン嬢は、母と共にランブイエ邸に出入りし、ランブイエ嬢やポーレ嬢といった屋敷の花に次ぐ地位を占めて、ヴォワチュールの書簡や詩の中でたびたび語られる。またその弟のダンギャン公はランブイエ邸に出入りする若い男性たち(Petits Maîtres)の筆頭であった。彼らはいずれフロンドの乱などでフランス史の主要人物となっていく。

小論ではこの兄弟とヴォワチュールの関わりを、詩や書簡を通じて見てみよう。

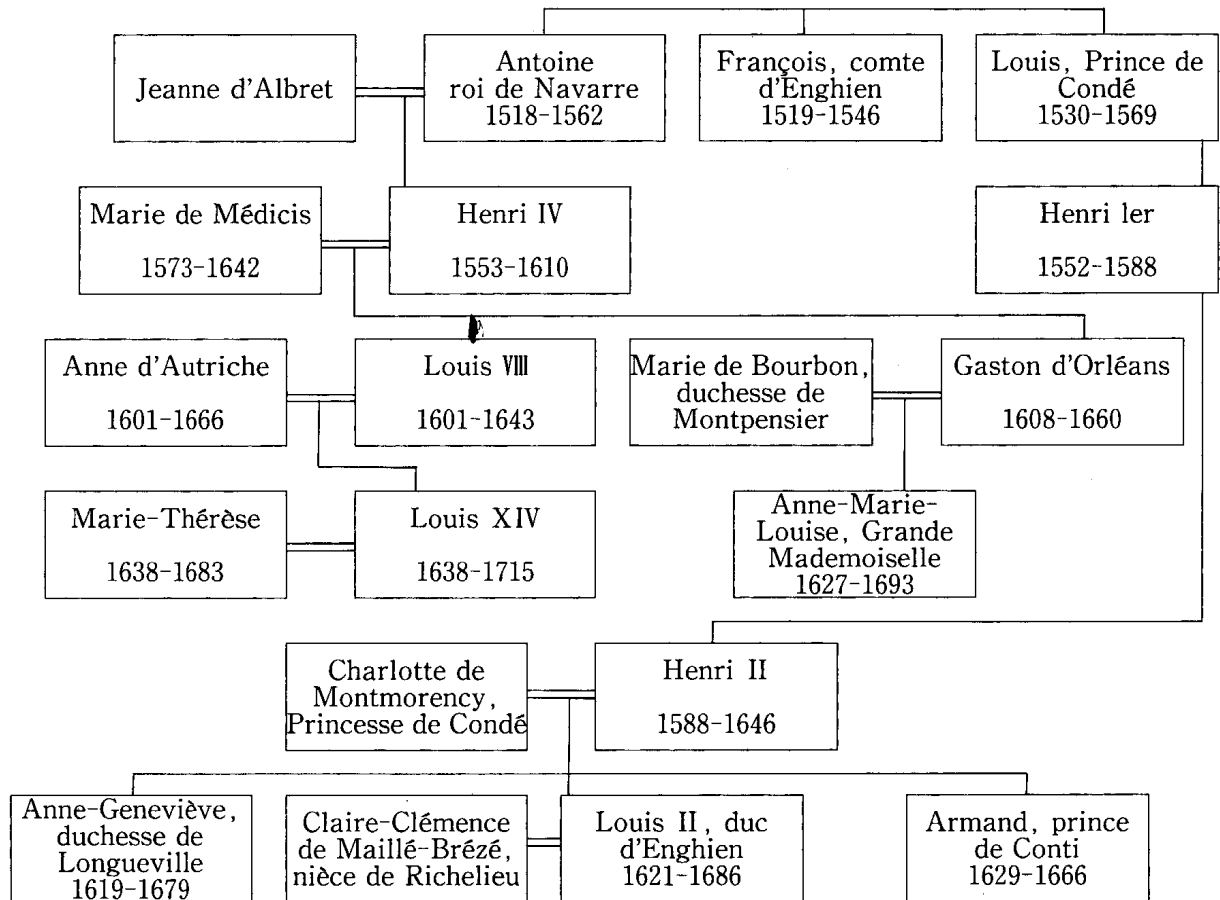
* * *

コンデ大公家はブルボン王家に最も近い親王家であり(次頁系図参照)、アンリ4世の叔父ルイに発する。ルイの孫アンリ(Henri de Bourbon, Prince de Condé)はシャルロット・マルグリット・ド・モンモランシー(Charlotte-Margueritt de Montmorency, Princesse de Condé)との間に三人の子供をもうける。長女がアンヌ・ジュヌヴィエーヴ、後のロングヴィル公爵夫人(Anne-Geneviève de Bourbon, duchesse de Longueville)、長男がルイ、ダンギャン公、後大コンデ(Louis de Bourbon, duc d'Enghien, le Grand Condé)、次男がアルマン、コンチ大公(Armand de Bourbon, Prince de Conti)である。この三人の内、上の二人は母と共に幼いころからランブイエ邸の常連であった。次男のコンチ大公は聖職につくための教育を受けていてランブイエ邸には出入りしていない。したがって我々にはなじみが薄い。もっとも、この人物はヴォワチュールを通じてはなじみがなくても、地方遍歴時代のモリエールの保護者として、そして後に自由思想家から信心家に転じた演劇の攻撃者であったゆえに、モリエールの『タルチュフ』のモデルと目された人物として文学史のなかでは名高い。

* * *

アンヌ・ジュヌヴィエーヴ・ド・ブルボンは1619年8月27日に生まれる。後にフロンドの乱の黒幕として活躍し、ラ・ロッシュフーコーを愛人とするこの人物も、ヴォワチュールが親しくしていた頃は愛らしいお嬢さんで、ランブイエ

Table généalogique des Bourbons



家の花たち、ジュリー・ダンジェンヌやアンジェリック・ポーレの年少の遊び相手であった。彼女はヴォワチュールの書簡の相手としてよりも、書簡の中で言及される人物として我々になじみ深い。例えば1630年、ラ・ヴァレット枢機卿(Louis de Nogaret de la Valette)宛の書簡の中でランブイエ邸の人物たちによるパリ北郊の La Barre の城館への小旅行の様子が語られる¹。

「[La Barre の庭の噴水に]² 近づくと、生垣の中にある壁龕の中に11歳か12歳ほどで、ギリシャやテッサリアの森も見たこともないくらい美しいディ

- 1) La Barre はランブイエ家の常連であった Anne de Neufbourg du Vigean の領地であった。なおこの人物の次女 Marthe du Vigean は後ブルボン嬢の弟ダンギャン公に想われる。この恋愛については後に触れる。
- 2) 引用の中で [] で囲んだものは、田島による補注。Ubicini、Lafay による注は、「原註」と特記した。

アーナに気づきました。彼女はその弓と矢を目の中に持ち、その周りには彼女の兄弟の光「ディアーナはアポロの姉妹」を湛えていました。そばの壁龕には彼女に従う水の精の一人がおりましたが、従者にしては十分に美しく優しげでした。おとぎ話を信じない人は、それはブルボン嬢でありプリアンド嬢だと思ったことでしょう。」(ラ・ヴァレット枢機卿宛、1630年末か、Ubicini, I., p.46-47.)

ヴォワチュールはラ・ヴァレット宛の書簡の中で、しばしばランブイエ嬢に言及する。ラ・ヴァレットはランブイエ嬢の母コンデ大公夫人の愛人であったので、コンデ大公夫人と、ブルボン嬢の近況は、ラ・ヴァレットに報告すべき第一の事柄だったからであろう。

また1633年亡命先のマドリッドからポーレ嬢に宛てた書簡の中では、「ヴォワチュールを砂糖漬けにでもすれば」というブルボン嬢の発言を引用して言う。

「私を砂糖漬けにして保存しておくというブルボン嬢の冗談は素敵なものだと思います。でもこんな苦渋を和らげるためには、砂糖が沢山必要なことでしょう。そしてその後は、私は小さなレモンジャムみたいな味になっているでしょう。みすばらしい感謝を千語ついやしても、ブルボン嬢が私を覚えていて下さった非常な幸福に感謝出来ません。心よりあのオーロール(あなたがあの方におつけになったこの名前はとても似合うと思います)に、自分に値する美しい一日が続きますようにと、そしてあの方の人生の日々が雲から免れ、その顔や心のように澄んで穏やかでありますようにと祈ります。」(ポーレ嬢宛て、マドリッド発、1633年4月、Ubicini, I., p.116-117.)

他に1634年1月のランブイエ嬢宛の書簡の中では、ブルボン嬢の美しさと知性を称える。

「かつて私が昼の星と呼んだあの天体「ブルボン嬢」はかつてなく大きく素晴らしく、全フランスを照らし燃え上がらせています。その光は私どもがおります闇の中までは達しませんが、その評判は届きます、そして私の聞くところでは、太陽もそれほど美しくはないということです。その星を息づかせている知性はその力の、またその輝きのなにもものも失ってはいないことを、またその美しさがこの世で最も美しいものであることを疑わしめ得るものは、ブルボン嬢の心を除けばないということを嬉しく思います。」(ランブイエ嬢宛て、ブリュッセル、1634年1月6日、Ubicini, I., p.203.)

韻文の中ではブルボン嬢は暁の女神オーロールに喩える。この喩えは上に引いたポーレ嬢宛の書簡に見えるように、彼女の発案によるものだろうか。もっとも Belle Matineuse の詩人にとって、オーロールは常套的に使われる形容ではあるが。

ブルボン嬢をオーロールに喩える詩を二題。なお、各段落末尾の数字は、行番号を示す。

「私が崇拝する美しい女神よ、ながながと泣かないでください。もし真珠がオーロールの涙でできているならば、あなたは一財産を無益に失われるのですよ。(1-4)

もしその涙を私のために流してくださるのなら、あなたは私をととても幸せで金持ちになさってくださいのに。あなたは小犬のために、王をあがなうにさえ十分な程の涙を失われたのです。(5-8)

あなたほどは美しくはないということ以外あなたにそっくりで、天にあってむしろあなたにこそそぐわしい名前をもっている女神が、その美しい口から溜息をつきながら、寝床から出ながら泣くということです、でもそれは愛人のためであって犬のためにではありません。(9-14)

あなたが彼女の様に泣きたいとお望みなら、あんまり残酷でないようにならなければ、そして友情を有効にお使いにならねば、私達のためであるかぎりお泣きなさい、でも奇妙な憐れみで、人間を殺されるあなたが、犬のためにお泣きになりませんように。(15-20)」(Lafay, I, p.47., Ubicini, II., p. 300.)

「我等が真紅のオーロールはおねむで、周囲では話さぬように、そして夜を明けさせるためにしかお起こし申さぬように。(1-5)(後略)(Lafay, I, p. 85., Ubicini, II., p.339.)

もっともこのようにいわゆる詩的な喩えばかりがヴォワチュールの詩ではない。トイレに通うランブイエ嬢もヴォワチュールの筆の材料にされることがある。

「下剤をのんだブルボン嬢へ、

この夜寝ながら私は、5、6度、そのお側ではどんなものも私に気に入りが無いという異様なお姿のあなたにお目にかかりました。あなたのスカートはとても明るいオパール色であなたのガウンはダイヤモンドのようでした。

(1-5)

天の下ではどんなものもこんなに美しくはありません、太陽もこれほど明るくは輝きません。そしてあなたはその光を5、6倍は越えていらっしゃいました。(6-9)

眠りも私たちを空しく騙そうとしたこと。偶然その同じときにあなたは全く逆の状態「醒めて」でいらした。でもところで例の件はいかがでいらしたのでしょうか。5、6度、そうっと「トイレに」おいでになったのでしょうか。(10-15)」(Lafay, I., p.47., Ubicini, II., p.300.)

こうしてヴォワチュールの筆によってたびたび話題に登ったブルボン嬢だが、年少だったためか自身に宛てたヴォワチュールの書簡は二通しか残されていない。そのうち一通目、幼いブルボン嬢に宛てた1630年頃の春か初夏の書簡は引用するに値する愉快な手紙である。ある日不機嫌であったブルボン嬢を楽しませる役割がヴォワチュールに課せられる。だがヴォワチュールはその役割をうまく果たすことができなかった。後日それを聞き及んだランブイエ嬢やポーレ嬢はヴォワチュールに、布で胴上げする罰を科した。その頃リヨンに滞在していたブルボン嬢宛にその罰の様子をヴォワチュール自ら書き送る。

「拝啓、私は金曜日の午後、せっかくそのために派遣されたというのにあなたを笑わせてさしあげられなかったので、胴上げされてしまいました。ランブイエ嬢やポーレ嬢の訴追にランブイエ夫人が判決を下されたのです。処罰は、大公夫人とあなたがお戻りになってからに延期されていましたが、その後、彼女たちは、あんまり延ばしてはならないし、楽しみのための用意されている筈の季節「春」に苦しみを延期してはならないとお考えになりました。私は泣き叫び、抵抗しはしましたが、毛布が用意され、この世で最も強そうな4人が選ばれました。この世で誰一人として私ほど高い所にいた者はいないということと、運命も私をこれほどの高みに引き上げるとは信じられなかったということをあなたに申し上げます。毎回、彼らからは私が見えなくなり、私をかつて驚が昇ったことがないほどの高みに送り込みました。山が私の下の方でさがっていくのを見、風と雲が私の足元で動いているのを見ました。かつて見たことがない国やかつて想像したことのないような海を発見しました。沢山のものを一時に眺め、地球の半ばを一望に見ることほど楽しいことはありません。でも断言いたしますが、このようなものも、空中に浮いていて、いずれ落ちていくことが保証されていたのでは不安なしには

見れっこありません。私を怖がらせた第一のことは、私がかんりの上において、下の方を見ると、毛布は全く小さく見えて、私がその中に戻るのは不可能なように思えたことです。これでちょっと動揺しました。でも私の目を同時に引いた沢山のものの中で、しばらくの間、私の恐れを取り去り、本当の喜びで感動させたものが一つありました。ピエモンテの方では何をやっているのか見てみようと思つたら、あなたがリヨンで、ソーヌ河を渡っていらつしゃるのが見えたのです。少なくともこの世で最も美しいお顔の周りに大きな光と沢山の光線を見たのです。どなたがあなたとご一緒だったか、はっきりと見分けられませんでした、というのはそのときには私は頭を下にしていたからです。それに、あなたが私をご覧になったとは思いません、だってあなたは別の方向をご覧になっていたのですから。私はあらんかぎり合図を送りました、でもあなたが目を上げられた時には私は落ちていて、タラール〔リヨンの北西の町〕の山の頂の一つが私をあなたの目から隠してしまいました。下に降りた時、彼らにあなたのご様子を伝えて、私はあなたを見たと言おうとしました。でも彼らは私が不可能なことを言っているかのように笑ひだし、前より一層私をはねあげようとしていました。見ていない人には信じられないような奇妙なことが起こりました。彼らが私をととても高くほうり上げると、降りてくるときに私は雲の中に入り込み、それがとても厚かったものですから、身の軽い私はかなり長い間落ちずにその中にひっかかってしまったのです。それで彼らは私がどうなったか想像できずに上を眺めて、毛布を持ったままずっとじっとしていました。幸運なことに風は全くありませんでした、もしあつたら雲が動いて私をどちらかの方に運んでしまつていて、私は地面に落ちることになっていたでしょう。そうすると私は大怪我をせずにはいられなかったことでしょう。でも、もっと危険な事故がありました。彼らが私を最後にほうりあげた時に、私は鶴の群れの中に入り込んでしまったのです。鶴たちは最初は私がそんなに高くいるのに驚いたようですが、私に近づいてみて、私を鶴とずっと戦争をしている例のピグミーの一人だと思ひ³、私が彼らを空の中ほどまで監視しに来たと思つたみたいです。すぐに

3) ギリシャ神話による。ピグミーはエジプトの南、ナイル河の上流に住むと言われていた種族である。彼らの中にオエノエというヘーラー神を敬わない美少女がいた。オエノエはニコダマスと結婚してモプソスという息子をもうける。ヘーラーはオエノエを憎み、こうのと(あるいは鶴)に変える。鳥に変わった母はピグミーのままにとどまった息子を取り戻そうとするが、ピグミーたちはこれを許さず戦争となったという。ヴォワチュールは小柄であつた。

彼らは大きなくちばしで私をつつきにやってきました、それもあいくちで100回も突き刺されてしまったと思えるほど激しくです。私の足をくわえたそのうちの一羽は、私が毛布の上には落ちられないほど執拗に私を追い回しました。私を苦しめていた人たちはこれを見て、私を敵たちの思うがままにさせてしまうのはいけないと思ったのです。というのは鶴たちは沢山集まってきて、私がさらに送り込まれるのを空にじっと待っていたからです。もう立ってられないほど憔悴した私を、その毛布で家に運んでくれました。実際本当のことを申しますと私のように弱い人間にはこの実験は少し乱暴でした。こんな行動がどれほど横暴で、どれほど多くの理由であなたがこれに反対なさらなければならないかおわかりになるでしょう。実際、命令することに多くの資質をもってお生まれになったあなたにとって、早いうちから不正を憎むことに慣れ、迫害されたものをあなたの保護下にいれることに慣れることはとても大切なのです。ですからお願いです、あの行ないが、あなたがお認めにならない暴行であるとまず宣言され、私の名誉と力の回復のために、ランブイエ邸の「青の間」に紗の蚊帳が私のために用意され、私にとって不幸の原因であったあの二人のお嬢さんが、1週間のあいだ私にすばらしく奉仕し、治療されることをお願いしたいのです。そして部屋の隅ではいつもジャムが用意され、二人のうち一人が火を吹いて、もう一方は私のためにシロップを皿の上に入れて冷まし、時折私に持ってくることしかしないようお願いしたいのです。こうしてあなたは、私に正義の行為、あなたほどの偉大で美しい少公女に適う行為を行なわれるのです。敬具」(Ubicini, I., p.40-44.)

その後ブルボン嬢は成人し、1642年6月2日、王族として取り扱われていたロングヴィル公、アンリ・ドルレアン(Henri d'Orléans, duc de Longueville)と結婚。ヴォワチュールの書簡には登場しなくなる。

* * *

ブルボン嬢の弟ダンギャン公、ルイ・ド・ブルボン、後の大コンデは1621年9月8日生まれ。父コンデ大公が亡くなる1646年まではダンギャン公と呼ばれていた。趣味人として名高く、後年パリでは禁止された『タルチュフ』を居城のシャンティーで上演させるなど、文人たちのパトロンとなる。しかし若いころの才能は政治や文芸よりも軍事に向いていた。彼はランブイエ邸に出入りしていたころ、ランブイエ邸の常連ヴィジャン男爵夫人の次女マルト・デュ・ヴィ

ジャン(Marthe du Vigean)に想いを寄せていたが、悲恋に終わる⁴。リシュリユーや父コンテ大公の画策でリシュリユーの姪であるクレール・クレマン・ド・マイエ・ブレゼ(Claire-Clemence de Maillé-Brézé)と結婚を強要され(1641年2月11日)、ヴィジャン嬢は修道女になる。ダンギャン公とヴィジャン嬢との恋愛についてヴォワチュールは次のような短い歌を書いている。

「ヴィジャンが宮廷を離れたとき 楽しみ、気品、愛は修道院に入った。この日、目は涙を流し、この日、美はヴェールをまとい、独りでいるとの誓いを立てた。」(Lafay, I., p.121.)⁵

この時期フランスはスペインと争っていた。ハプスブルグ家はカルロス1世(Charles Quint)以来スペインを併せ、ヨーロッパ大陸に広大な領土を有し、さらに新大陸の富を独占していた。1630年頃にはオーストリアを含む神聖ローマ帝国領、スペイン、ポルトガル、フランドル、ミラノ、ナポリはハプスブルグ家の下にあり、フランスは三方から囲まれていた。

1635年以前からフランス国内では半ば公然とスペインに後押しされた反王権の反乱が時折起こっていた⁶。1635年5月19日、ルイ13世はスペインに対し宣戦布告、フランスはフランドルおよびラングドックの二面でスペインに敵対する。

1636年にはスペイン軍はソナム、オワーズ川を遡ってパリに入ろうと北からフランスに進入する。もっとも北フランドルの情勢が不安定なために深く進入

4) ヴォワチュールはこの女性の美しさを、ブルボン嬢と同じオーロールに喩えて称えている。「我等がバールのオーロールは今や太陽となられ、天には似ているものではなく、地上にはこれほどまれなものは存在せず。」(シャンソン、「ブランル・ド・メッツの調べに乗せて」の61-64行目(Lafay, I., p.95., Ubicini, II., p.345-346.) Lafayによると、書かれたのは1634年頃、ヴォワチュールがスペインから帰って後であろう。ちなみにこの詩はパリからオルレアンへの道程を折り込んでおり、道中様々な人への言及がある。ブランル・ド・メッツとはこのころ流行した踊り。

5) Ubicini 版には無い。Lafayによるとこの作品は1880年の Octave Uzanne 版にヴォワチュールの作品として収められているが、Uzanne がアルスナル図書館で発見したと言っている原稿はなく、作品自体もヴォワチュールのものかどうかは確かではないとしている。

6) 1632年のモンモランシーの乱については拙論「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」参照。

できず、アミアンの近くのコルビーを落とす。パリは恐れおののくが、秋にはヴォワチュールの主人ガストン・ドルレアン(Gaston d'Orléans)の指揮でコルビーはフランスの手に取り戻される(11月14日)⁷。

1643年5月、前年リシュリューを亡くしたルイ13世が亡くなったとき、フランドルのスペイン勢力は老練なフランシスコ・ダ・メロ(Francisco de Mello)に指揮され、再び北からパリを目指し、国境の町ロクロワを包囲していた。ダンギャン公が派遣されるが、21歳の将軍は何も期待されず、パリからは自重するようにとの命令されていた。

5月19日。前日から両軍はロクロワ郊外に対峙していた。決戦はこの日に持ち越されていた。フランス軍の右翼を指揮していたダンギャン公は、夜明け前に両軍の間にあった森に敵に悟られずに進出し、アルビュケルク(Albuquerque)将軍指揮下の敵左翼を突く。フランス軍の方が戦線を長く敷いていたため、余った最右翼のガッシオン将軍(Gassion)がスペイン軍の左側面を突き、スペイン軍の左翼は崩れる。ダンギャン公はそのまま苦戦の中央の味方歩兵を支援する。スペイン軍の方が左翼以外は優勢だったが、左翼の戦線が破綻したため、右翼が後退し中央の歩兵部隊が取り残され、降伏する。損害はフランス軍が2,000に対し、スペイン軍は戦死8,000、捕虜7,000とフランス軍の圧勝に終わる。

この戦勝の知らせにヴォワチュールは祝意を表す。

「殿下、(中略)本当のことを言えば、あなたのお年で、彼らの経験のためだけであったにせよ尊敬なさってしかるべき二人の老練な名将〔メロとアルビュケルク〕にショックを与えられ、フランドル地方の最良の人物の一人であると言われていて、オレンジ公さえ敢えて触れようとはなさらなかったフォンテーヌ伯を殺させられ、王の伯父であり、王妃の兄弟でもあるとある大公から、その方とはなにも争ってはいらっしゃらなかったのに16門の大砲を奪われ、あなたを非常に親切に通過させたスペイン軍の精鋭部隊を滅茶苦茶になさったというのは、大胆に過ぎましたし、乱暴に過ぎました。ミュニエ師〔タルマンによる原註、コンデ大公がダンギャン公につけたジェズイット神父〕が何とおっしゃるか存じません、でもこれらすべては良俗に反していますし、告解の大きな種がありそうに思えます。あなたは悪魔のように執拗でいらして、あなたがなにも争われないというのはよろしくないと良く聞い

7) この機会にヴォワチュールは書簡90および、ロンド80で、リシュリューと目される指導者を称えている。拙論「ヴォワチュールのロンド注解」参照。

ておりました。でも私はあなたがこの点において逆上なされやすいと思っ
てはいなかったと認めます、ですからもしあなたがこのままお続けになれば、
あなたは全ヨーロッパにとって耐えがたくなってしまい、皇帝もスペイン王
もあなたと共に生き永らえることはできますまい。でも殿下、良心は別にし
て、政治的に言えば、殿下が最も輝かしい勝利を収められたことと、我々が
見た今世紀の最重大事と、「重大」[原註、「重大党」に対する仄めかし。この
名は、外出する度に重大な事柄だと言っていた彼らをコルニュエル夫人がそ
う呼んだことから付けられる。]ではないにしてもそうありうる行動をこんな
に強く殿下がおできになれることを私は殿下と共に喜んでいます。恐れてい
たあらゆる嵐からあなたが守られたばかりのこのフランスは、あなたが人生
の入り口において、シーザーでさえも自らの武勲すべての頂点に置きたいと
望みもしようかという、そしてあなたがあなたの先祖の王たちから受け継が
れたのと同じような威光を彼らに返すような武勲を立てられたことに驚いて
います。あなたは、勇気はシーザーには前もって備わっているのだというか
つて言われていた事を立証されたのです、なぜならあなたは精神において、
知識において真のシーザーであり、敏速さにおいて、細心さにおいて、et per
omnes casus Caesar [そしてあらゆる条件によってシーザーである]、あな
たは人々の判断を欺き、その希望を凌駕なさったのです。あなたは、経験は
普通の人間にしか必要ではないこと、英雄の勇気は全く別の経路でやって来
ること、それは一步一步と高まっていくのではなく、天の作品は最初から完
璧な状態であることを示されました。この知らせはこちらでは皆を驚かせ、
宮廷のあらゆる顔に喜びあるいは蒼白を表させました。ご婦人方と言えば、
舞踏会において他のすべての男性をやっつけられるのが見られた方が、軍事
においてもより輝かしい勝利⁸を収められた、そしてフランスの最も美しい顔
[頭]が同時に最良で最強の頭だと知ってうっとりしています。ボーモン嬢[原
註、彼女がコンデ邸にいた時、ダンギャン公は彼女の面前でコリニーと笑っ
たりして、彼女は十分に丁重にはとり扱われなかった。]に至るまであなたを
褒めない人はいません。あなたに対して対抗的であったどんな人も、あなた
はふざけることしかしないと言っていたどんな人も、今回はあなたはふざけ
てはいらっしゃらないと認めています。そしてあなたが打ち負かされた敵の

8) 使われている単語は *défaite* (敗退) であるが、敵が敗退したという意味で「勝利」と訳す。Ubicini の掲げる異本でも、舞踏会で勝利した方が、軍事でも云々となっている。

多さを見て、もうあなたの部下であることを恐れない人はいません。シーザーよ、私がこんな率直さで語ることを良しとしてください。そしてあなたが受けになるべき称賛をお受けください、そしてシーザーのものをシーザーに返すのをお許しください [Rendez à Cesar ce qui est à Cesar, et à Dieu ce qui est à Dieu. (マタイによる福音書、22-21)]。私は云々。(パリ発、1643年5月、Ubicini, I., p.396.)

この戦勝の余勢を駆ったダンギャン公はドイツで苦戦する部隊を支援するためにライン河を渡る。軍を率いて無事に川を渡り敵地に入った公に宛ててヴォワチュールは祝いを述べる。川を渡ったばかりの將軍にはやはりそれ相応の技巧で遇さねばならない。そこで思いだされたのがパリを出発する前にダンギャン公がご夫人方とやっていたちょっとした遊びの「魚ごっこ」。そこではダンギャン公はカマスの役柄であり、ヴォワチュールは鯉の役柄だった。

「ようこんにちは、カマスの大將 [compère]、こんにちは、カマスの大將。私はずっとライン河の水さえもあんたをとどめることはできまいと踏んでおったのさ。それにあんたの力と、あんたがどれほど大河で泳ぐのが好きか存じておりますので、ライン河の水などあんたを怖がらせはしないし、あんたが他のいろんな冒険をやり遂げられたのと同じくらい見事にお渡りになるだろうと思っておりましたよ。それでも私達が予想しておりました以上に運良く事が運び、あんたにせよ、あんたの部隊の人達にせよ鱗一枚なくすでもなく、あんたのお名前の噂だけで、あんたに対抗するはずだった者たち皆を散らしてしまったことに喜んでいます。これまであんたはどんなソース [状況] でも素晴らしくいらっしゃいましたが、ドイツ風のソースはあんたに立派な風味を加えましたし、そこに添えられた月桂樹はあんたを素晴らしく引き立たせたということは認めないわけにはいきません。それにあんたをフライにして一つまみの塩で食べてやろうなどと思っていた皇帝の手の者たちは、とてもやり遂げることはできませんでした、私に背中があるように。それに、ライン河の岸は守り通すと誇っていた者たちが今はドナウ河のそれさえ確保できそうにないのを見るのは楽しいかぎりです。こんちくしょう、なんと [素早く] あんたは進まれたことか。あんたが身を沈められんと飛び込まれた川ほど、乱れ、深く、早い川はありはしません。本当にあんたは例の「若い獣肉、老いた魚 [ほどおいしい]」という格言を裏切られました。というのは、あんたは若いカマスでしかいらっしゃらないのに、最も老いた蝶

鯨さえ持ち合わせぬ堅固さをお持ちなのですし、そいつらが始めようと思ひさえしないようなことをあんたはやり遂げてしまわれたのですから。したがってあんたはあんたのご評判がどれほどまで拡がっているかご想像にはなれますまい。あんたの勝利が賞讃されない沼や、泉や、小川や、川や、海はありません。あんたを思わぬ [songer] 淀んだ水 [eau dormante] などありません。あんたを噂せぬ [bruit de] 激しい流れもありません。あんたの名は海のまんまん中まで達し、水の表面を渡り、世界を限る大海もあんたの栄光を限ることはありません。先日、鰈の大將と、Grenaut⁹の大將と他に何匹かの淡水魚の仲間と、きゅうり魚の家で夜食を取っておりますと、2番目の料理として、すでに世界を2周もして最近西インドの方からやってきて塩の船に従っていてスパイとしてフランスで捕まった大きな鮭が出されました。その鮭がいうには、水面下に、あんたが知られ恐れられないような深い淵はないし、大西洋の鯨達も水を吐き、あんたの名を告げられるだけで水面下に身を隠すということです。鮭はもっと色々話してくれたことでしょう、でも彼はちょっとしたスープに入っていました、それゆえに話すことは容易ならざる体でした。ほとんど同じようなことが、ノルウェー方面からやってきた鯨の一行からも言われました。その者たちが言うには、その国の海は、あんたがお足を北の方に向けたという何羽かの黒鴨がもたらした噂に恐怖して、いつもより2箇月も早く凍ってしまったそうです。そして大魚達は、ご存じのとおり小魚共を食べるものですが [Les gros poissons mangent les petits. (弱肉強食)], あんたによって食べられてしまうのではと恐怖しているということです。それらの大部分はあんたがそこまでは来ないだろうと、大熊座の下まで引っ込んでしまったということです。強気も弱気も警戒し、おののき、ことにあなごに至ってはあんたが皮を剥いでしまったかのように泣き叫び、岸辺一帯に響くような音を立てたということです。本当に大將よ、あんたは恐ろしいカマスなのでしょうか。カバや、鱸や、イルカにとっても気に入りますまいが、大海の最も偉大で最も考慮さるべき主人でもあんたに比べれば、哀れな怠け者でしかありますまい。もしあんたがお始めになったように今後お続けになるのであれば、あんたは海ごと魚を飲み込んでおしまいになるでしょう [Vous avalerez la mer et les poissons.]. でもあんたの栄光はこれ以上高くも遠くも行けないと保証されたまさにその地点にあるのです。こんな

9) 頭部の大きな魚。Littréによれば、この語は地方的な呼称であり、種を同定できない。

にお疲れになった今となつては、セーヌの水に一息おつきになり、ここであんたをじりじりしながら待っているたくさんの美しいテンチや、きれいなパーチや正直な鱒たちと楽しく休憩なさる潮時ではないかと思います。でも他の魚達の、あんたに会いたいという情熱がいかに大きなものであっても、私のそれには適いますまいし、あんたに私がいかにほどあんたのつまらぬ召し使いであり、おしゃべり女 [commère] であるか伝えたいという欲求ほどではないでしょう。

鯉より(パリ発、1643年11月、Ubicini, I., p.401-404.)

1644年には、ダンギャン公はさらに勝利を重ねる。ライン河右岸のフライブルグはアルザス防衛の要衝として永くハプスブルグ家の領土であったが、1638年以来フランス軍に支援されたザクセン・ワイマール公との間で争われていた。ダンギャン公はフランス軍とチュレンヌ(Maréchal de Turenne)元帥の指揮するワイマール軍を併せて攻撃する。敵将メルシー(Mercy)の堅い抵抗にフランス軍は大きな犠牲を払った末、敵を退却させる。勝敗は定かではないが、戦略的にはダンギャン公の勝利であった。この戦いについての書簡はない。

1645年8月3日、ダンギャン公は再びババリア地方のネルトリンゲン(Nördlingen)でメルシー軍と会戦。メルシーは両翼を高台に守られた谷間に布陣する。メルシーは高さの利点を行かしてフランス軍に砲火を浴びせる。ダンギャン公は両軍の間にある村落アーレルハイム(Allerheim)に歩兵を避難させて砲火を避けようとした。ところがアーレルハイムは二度の攻撃にも落ちず、ダンギャン公自らが最後の部隊を率いて三度目の攻撃をかける。メルシーはここで勝利を確信して予備軍を投入するが、戦死する。フランス軍は右翼が破れ、グラモン將軍(Grammont, Antoine III, comte puis maréchal de Guiche)¹⁰が捕虜になるが、左翼のチュレンヌ元帥が敵右翼の高台を奪って反転、アーレルハイムを側面から囲む。フランス軍右翼を破った敵左翼が支援に入ろうとするが日没のために諦め、退却する。損害は双方同じくらいだったが、敵将メルシーが戦死したため、実質的にダンギャン公の勝利となる。

この勝利はフランスにとっては喜びでも、ランブイエ家にとっては悲しみであった。ダンギャン公に従っていたランブイエ家の長男で、ダンギャン公やヴォワチュールの遊び仲間であったピザニ侯(Léon-Pompée d'Angennes, mar-

10) 若い頃からランブイエ邸の常連であった。Historiettes, I. p.446. など参照。

quis de Pisani)が戦病死する。ヴォワチュールがことに親しくしていた相手だったので、ピザニの死を悼むダンギャン公宛の書簡も陰鬱である。

「閣下、もし私が勝利をあなたと一緒にすぐに喜ばなかったとしても、それがピザニ侯の死を代償にしたのであれば変だとは思いません。殿下はお許しくださるだろうと思います。殿下、あなたにお仕えするために喜んで命を差し出そうという私です、あなたにお仕えするために命を失った人たちが命を粗末に使ったとは思いません、でもあなたの勝利にもかかわらず泣かなければならないほどに不幸なのであれば、彼らの代わりになりたかったと心から望みたいところです。でも、私の心に触れうる最も厳しい悲嘆を持ちながらも、あなたが多くの危険からこんなに幸運にこんなに栄光を手にして脱されたこと、そして私が失うかもしれないすべての人物たちに捧げられるであろうあらゆる尊敬と熱意を寄せることのできる人物を天が守ったこと、それらは私にとって小さな慰めではありません。(後略)(1645年8月、Ubicini, II., p. 21-22.)

ところがピザニ侯に続いてダンギャン公までもが病に倒れる。この病はヴォワチュールはもちろん、ランブイエ邸と宮廷中の人々を心配させた。

「閣下、この世で最も大きな苦悩と、精神が持ちうるあらゆる苦悩を持ったと思っていたのですが [原註、ピザニ侯の死]、殿下のために持った心配は、私がこれまでありえたよりもずっと不幸になりうるということ、私は非常に [大事なものを] 失ったとしても、まだ失いうるものが無限に残されているのだということを悟らせました。あなたが置かれた危険を考えることが私の心の中でどのような混乱であるか、この世に起こりうると私が想像した無秩序や暗黒がどのようなものであるか、あなたに語ることはできません。私は常に幾許かの希望を持っておりました、この国の繁栄を望んでいる多くの兆候を与えていた天がこんなに早くフランスからあなたを取り上げはしないだろう、その人物を介してこれからもっと多くの奇跡をなすことを運命づけているように思われるそんな人物を天は見放さないだろうと。でも閣下、自らの本性よりも高く登る人間たちを快く思わない運命の悪意や、最上の高みにあるときに落ちてしまうという人間にかかわるものの常は、私に多くの

恐れる種を与えました。短く慌ただしいガストン・ド・フォワの隆盛¹¹、勝利の真最中でのワイマール公の死¹²、栄光と幸運の腕の中で殺されたようなスエーデン王のそれ¹³などがどんなときにも心に浮かび、私の想像に不吉な予兆ばかりを示しました。結局は神は人間を恐れさせるにとどまったのです、つまり人間たちにあなたを通じてどんな贈り物をしたのか、またどれほどあなたが地上で重要であるか良く考えさせるためだけにこの警告を人間に与えたように思えます。あなたの勝利の最もすばらしいものでも、あなたが危険な状態にいらっしゃるとの知らせにこちらの皆が置かれた驚きと、あなたのためにどれほどの涙とどんな目が泣いたかご存じになるときほどの喜びをあなたに与えたことはないでしょう。あなたがこのことをご存じになればとても嬉しく思います、あなたがご自身のためには何も恐れるものはないとお考えだとしても、少なくともあなたを愛する人のために恐れることを学ばれ、あなたが他の多くの人の命でもあるあなたのお命のより良き管理者になれるために。あなたのお命のためになされた多くの祈願の中で、私のそれ以上に熱心なそれはないはずだと信じていただきますよう慎んでお願いいたします、また殿下を敬う多くの人々の中で、私以上に云々。(1645年9月か10月、Ubicini, II., p.24-26.)

幸い病は癒え、ダンギャン公は凱旋する。ヴォワチュールはダンギャン公の戦勝と回復に327行の書簡体詩で祝意を述べ、また自らの健康に留意するようにと懇願する。

「殿下お帰りなさい、ドイツでの戦いと、この戦争の終わりにあなたを捕らえた病から。この病はスペインに思わせたものでした、ついに天がその国を救うためにあなたの命と、流布することを恐れられているこの申し分のない勇気を限ろうとしているのだと。でも、私たちに教えてください。(1-10) 戦場では、叫びや、警報、砲火、剣や槍、戦いの音と恍惚の中であって、

-
- 11) Gaston de Foix、イタリア戦争時のイタリア派遣軍の司令官、1512年、神聖同盟によるボローニャの包囲を解き、ラヴェンナでの戦いに勝利したが、その戦いのさ中に死去。
 - 12) 既に述べたように、1638年、ザクセン・ワイマール公ベルナールはフランス軍に支援されてフライブルグをハプスブルグ家から奪うが、翌年死亡。
 - 13) 三十年戦争で活躍したスエーデン王グスタフ・アドルフは1632年 Lutzen で戦死。

あなたに死は何か魅力的なものを持っているように見えたでしょう、かつてそれは馬に乗り、甲冑を帯びて美しく思えたでしょう、でもその死は、ゆっくりとした足取りでうめいている病人に近づいてくるとき、別の顔つきをしていなかったでしょうか。死が震えながら冷たく病床の男を捕まえに来ようとしたときには、かなり醜く見えなかったでしょうか。(11-23)

自分を殺そうとしている秘密の毒に苦しめられているとき、力や、意識や視力が衰えているのを感じているとき、医者たちが彼らの目論見のことごとくを誤り、あおぎめた顔で誰かが小声で、「死ぬだろうか、死なないだろうか」「14日まで持つだろうか」と言っているのを聞くと、殿下、このような哀れな状態では、私どもがそうであるように、あなたの胸はドキドキと打ち、半ば神でいらっしゃるあなた方にしても、こうして死があなたの目を閉じようとするときには、他の者のように恐怖心をお持ちになったと告白なさい。(24-39)

死に行く者たちのこれらすべての飾り物、つまりあなたに説教する告悔師、気力を失っている友人、悲しげで泣いている召し使いたち、これらは私たちに死をより恐ろしげに見せます。あなたがフライブルグの山々や、ネルトリンゲンかロクロワの野でそれをご覧になったときには、死はそれほど恐ろしげではなく、それほどの恐怖もたたえずに歩き回っていたことでしょう。(40-49)

多くの武人たちの額よりもあなたのそれを威厳あらしめた月桂樹の影にあるのに、雷鳴を轟かす天の怒りも尊重し敢えて触れようとはしなかったこの緑の葉の下にあるのに、沈鬱で、こわがりで、悲しげで、やつれて、もの憂げな熱があなたに近づく勇気を持っているとは、あなたの勇気をとどめるとは、あなたのお顔を変えるとは、あなたの膝を震えさせるとは、全く不当だと思いでしょう。それはあなたに、破壊的な「ローマの戦の女神」ベローナが剣や砲火や打撃の中にあっても、「ローマの戦の神」マルスが怒りの頂点にあっても、何度もそばにいた死でもできなかったことなのに。(50-67)

あなたは憂鬱な死があなたを、私たちが冥界あるいは三途の宿とよんでいる世界へ連れ去ろうとするのを見ながら、歴史に永く生きる栄光によって慰められたのでしょうか、あるいは「あなたの」お年にもかかわらず、私たち、ダスシ¹⁴それに私が、私たちの作品の中であなたに与えようと企てていた不滅で慰められたのでしょうか。(68-77)

14) Charles Coypeau d'Assoucy, 1605-1677、ヴォワチュールと同時代の音楽家、詩人。

あなたの行ないから彼は、銅よりは永持ちする本を作ろうとしました、私の方は、もし自賛させていただくならば、彼に続くに値します。でもあなたを甦らせる前に私たちはむなしく歌ったことになるでしょう。他の色々な奇跡を知っているユピテルの9人の娘も、彼女たちの類稀な声をもってしても、蘇生の術は持っていないのです。死は彼女たちの言うことを聞けないのです、だってこの残酷なる女には、オルフェが豎琴を甘美に弾いて彼女を魅了しユーリデイスを取り戻した古い昔から耳がないのです。暗黒のプルートが耳をそぎ、その穴を麻屑で塞いだのです(これは非常な不正です)。それ以来、皆むなしく死に懇願し、むなしく嘆き、怒鳴り、叫び、その武器の厳格さを非難するのですが、これらの音は全く聞き届けられず、私たちの嘆きや私たちの涙、叫び、騒ぎ声に対し死が返したものを何も見ないのです。(78-102)

私たち歌詠み、フェーブス[アポロンの別称]の聖なる乳飲み子たちは(私たちのこの世紀には余り尊重されてはおりませんが)私たちの音をもっと良く売りに出せたでしょう、名を甦らせるように人を甦らせられたら。私たちはあなたのあらゆる栄光を後世に教え、あなたの記憶を永遠の神殿に捧げられたでしょう。でも私たちのすばらしい作品の、私たちの歌の、私たちの雅歌の何物もあなたはお聞きにならなかったでしょう。大気に天、大地に海、すべてこの世をなすものはあなたにとっては消え去っていたのです。(103-118)

ですから考え始めてください、在ること、生きることが大事だと。御身を大切になさることをもっとお考えください。あなたがあんなに好んで追っていらっしゃる危険はあなたにどんな魅力を持っているのでしょうか。戦いの場で、あなたがアマデイスの腕とあんなに評判の高い勇猛さをお持ちのようにアマデイスの魔法のかかった防具もお持ちでいらしたら、殿下、私はあなたの勇んだ熱意をとやかく申さないでしょう¹⁵⁾。でも、もはや魔法がそんな武器にはならず、最も高貴な血であっても、たとえヘクトールやアレクサンダーであれ、最も低い身分のそれと同じくらい容易に流れうということがわか

15) *Amadis de Gaule*、16世紀始めスペインでガルシア・ロドリゲス・デ・モンタルボによって出版された騎士物語。スペインでは12世紀頃から知られていた。1540年にフランス語に翻訳されたが、訳者はピカルディ起源の原本を知っているとしている。ヨーロッパ中で人気が高く、騎士道物語のモデルであった。ヴォワチュールはしばしば言及する。

っていて、類のない力で死が矢を放ち、ほんのわずかの鉛がこの世で最も美しい顔¹⁶を壊してしまえる我々の世紀にあっては、立派な顔をお持ちの人はそれを気にかけられるべきですし、あなたの頭ほどのものは決して危険を犯すべきではありませんまいし、ご自身の利益のためにも私たちの利益のためにも、殿下、頭をしっかりと守られるべきです。(119-144)

命があなたの関心事の最小のものでしかないのは全く不当です、それがあなたから奪われてしまったらあなたは半分の価値しかおありにならないのです。王に、大公に、征服者におなりなさい、でも人は死のうというとき〔その価値が〕落ちてしまうものです、あの尊敬、あのうやうやしさ、あなたの後に従ったあの群衆、あれらのむなしい体裁は墓の中まではあなたに従いません。あなたの精神が何を企てようと、あなたの歩みが終われば、人はあなたを全く見放しましょう、半神であっても死んでしまえば全く小さなものです。(145-159)

誇り高い〔運命を定める女神〕パルクが私たちを、肉体を伴えない小舟にのせたとき以来、栄光や名声は夢や煙でしかなく、死んだ者のところまでは来ないのです。コキュートス〔地獄を巡る川アケロンの支流〕の岸辺を越えては、もう美点も勇猛さも血も語られず、アキレウスの影もテルシテース〔アキレウスはイリアスの英雄の一人、テルシテースもイリアスの登場人物だが、禿で跛でせむしの醜い男〕の影も、最も大きいものも、最も小さいものもすべて同列になるのです。(160-171)

一緒になってあなたの名前になるこの二つの高貴な音節〔ダン・ギャン〕は、あなたの全名声の光栄ある相続人となるでしょう、あの三つの勝利した軍事、あの三つの不滅の、何年もの内で見いだしうる最も偉大で美しい勝利、多くの武勲に多くの戦闘、多くの打ち倒された城壁、それらについては全地上が語ることでしょうが、それらは、この音節のためだけ、あなたを記念する石の像のためだけということになるのです。(172-185)

棺の中でセリゾールの名をまだ生き永らえさせているかの大公、その地で彼の腕はあれほどのスペインの部隊の誇りを砕き、恥辱と喪で満たしたのです、彼はフランソワ〔フランスの(François)〕の名を高めようという美しい野望に押され、敵を断末魔に追い込み、あなたが三度なされたことを生涯かか

16) La belle tête この表現は、先に見たロクロワの勝利を祝う1643年の書簡にも見られる、多分ダンギャン公の呼称として日常的に使われていたのであろう。

って一度だけやったのです¹⁷。(186-195)

不滅の血族のこの英雄は、あなたがお持ちになっていて、あなたが今新しい栄光で飾ることがおできになる名を持っていました。でも今生きていらっしゃるあなたはいつ、年月によって彼のように影になってあなたの終わった冒険をご覧になるのでしょうか。いつあなたの名が歌われるのでしょうか、いつあなたへの称賛は最も遠い国までもたらされるのでしょうか、あなたがた二人のうちのどちらがそれを享受されるのでしょうか、そしてどんなばね [秘密のきっかけ] が彼につけた以上の称賛をあなたに加えるのでしょうか。(196-209)

栄光が、その祭壇に仕えることによって与える永遠の称号と共に何を私たちに約束しようと、名声とそのラッパはむなしく、滅び行く音しか持っていないのです。盲目の宿命は、この名のために身をさらすもののためにしかこの名を譲り渡さないのです。最も偉大で、最も評価されたものでも、宿命の気まぐれがそう望めば、他のあらゆるもののように古び、あるいは忘却に沈み込むのです。(210-220) (中略、これより85行はダンギャン公ではなく、ガストン・ドルレアンやマザランを讃美する。)

しかしフェビュスは私を思っていたよりも遠くまで運び、始めたときよりも大きな声を私に貸し与えたようです。私の歌はあまりに進み過ぎました、世界が崇める殿下、私は引き下がるべきときです。こんなに高く、こんなに大胆な歌は豎琴とうまく調和していません、そこで辞め、あなたに申し上げます。(306-315)

愛してください殿下、生きることを愛してください。そしてあなたの美しい日々が永く幸運に流れ、私たちをあらゆる恐れから解放するようにしてください。世界のためにご自愛ください、様々の危険の中であなたの行ないの物語を長引かせてください。力強い宿命は、どんな夏にも、勝利をあなたの強力な手に負っているとお知りになり、フランスのために、そしてあなたの栄光のために100回目の夏まで生きようになさってください。(316-327)」(Lafay, II., p.231-245., Ubicini, II., p.390-399.)

この後1646年10月、ダンギャン公は当時スペイン領であったダンケルクを包囲する。ダンケルクは古くから戦略上の要衝としてスペイン、イギリス、フラ

17) イタリア戦争のさなか、1544年4月14日、アンリ4世の叔父に当たるダンギャン伯フランソワ・ド・ブルボンに指揮されたフランス軍は北イタリアのセリゾールでミラノ駐屯のスペイン軍を破る。系図参照。

ンスによって争われていたが1559年以来スペイン領となっていた。彼は陸からこの町を包囲、同盟国のオランダ海軍が海から港を封鎖する。17日間の包囲の後ダンケルクはフランス軍の手に落ちる。ヴォワチュールは当然祝意を述べる。だが若いうちからこうも戦勝ばかり繰り返されては、称賛の言葉に窮してしまうし、こう戦勝ばかり続けては、後世はあなたの武勲は誇張だと思ってしまうだろうと言う。

「閣下、あなたはそうしようとなさりさえすれば月を歯でお取りになるであろうと思っています。ですからあなたがダンケルクを取られたいうことに驚かないようにしています、ただそのことに関して殿下に何を言おうか、そしてどんな普通でない言葉で殿下について私が思っていることをお聞かせできるだろうかということで苦勞しているのです。(中略)最も小さなものから最も大きなものを作り上げることのできる雄弁も、そのあらゆる魔力をもってしてもあなたがなされたことの高みに肩を並べることはできません、他の事柄では誇張と呼ばれるものも、あなたについて人々が考えていることを表現するために非常に冷静に語る手段でしかないのです。確かに、殿下が毎夏、前の冬には付け加えうるものはなにもないと思われた栄光を何らかのことで増大させる手段をお見つけになるということや、あんなに偉大なデビューを飾られ、続けて大きな進歩をなされたのに、直前にあなたがなされたことがいつも最も栄光に満ちているというのは理解しがたいことです。私は当然あなたのご盛運を喜んでいます。でも私は予見しています、現在のあなたの評判を高めているものが、続く世紀におけるそれを損なうであろう、そしてこんな短い時間の、こんなに大きくこんなに重要な次から次の武勲は、未来においてはあなたの一生を信じ難いものにしてしまい、後代においてはあなたの話は小説として通るようになってしまうことだろうと。ですからお願いです、あなたの武勲に限りを付けてくださいますように、人間の精神の容量にお合わせになるために、そして彼らの信じる力が辿り着けないほど遠くまでお行きにならないためにというわけではないにしても。少なくともときにはお休みになり安全な場所においでになりますように、そして勝利にあってもあなたのお命のためにはらはらしているフランスが、あなたが与えられた栄光を何ヶ月かの間、静かに楽しめるようにしてくださいますように。でも信じてくださいますよう慎んでお願い申し上げます、あなたを崇拝し、あなたに祝福を送る何百万人という人々の中で、私ほど喜びと、熱意と、信仰心をもってそうしているものはなく、私は、殿下、云々。(1646年10月、Ubicini, II., p.

36-38.)

1646年12月、ダンギャン公は父の死によりコンデ大公になる。

大コンデにせよ、ロングヴィル公爵夫人にせよ、この後フロンドの乱に関わり、フランス史の主要人物になっていく。だがヴォワチュールはこれから先の出来事には言及しようもない。この後、決闘沙汰を起こしてランブイエ家から追われ、1648年には昔からの愛人であったサント夫人(Marguerite Vion de Saintot)らに見取られて亡くなる。したがって我々もコンデ家の姉弟の活躍を追うのはここまでにする。(1993年9月20日)

参考文献

Adam, Antoine; *Histoire de la littérature Française au XVII^e Siècle*, tome 1., Paris, del Duca, 1962.

Adam, Antoine; *Littérature Française, collection dirigée par Claude Pichois, tome 6., L'âge classique I (1624-1660)*, Paris, Arthaud, 1968.

Balzac, Jean-Louis Guez de; *Œuvres*, publiées par Valentin Conrart. 2 vols., Genève, Slatkine, 1967, (Paris, 1665.).

Bluche, François; *Dictionnaire du Grand Siècle*, Paris, Fayard, 1990.

Fukui, Yoshio (福井芳男); *Raffinement précieux dans la poésie française du XVII^e siècle*, Paris, Nizet, 1964.

Grimal, Pierre; *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, 11ème édition, Paris, P.U.F., 1991.

Lathullière, Roger; *La Préciosité, étude historique et linguistique, tome 1., position du problème, les origines*, Genève, Droz, 1969.

Magne, Emile; *Voiture et les origines de l'Hôtel de Rambouillet (1597-1635)*, Paris, Mercure de France, 1911 (2nd édition).

Magne, Emile; *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (Nouvelle édition).

Picard, Roger; *Les salons littéraire et la société française 1610-1789.*, New York, Bretano's inc., 1943.

Somaize, Antoine Baudeau de; *Le Grand dictionnaire des préieuses*, Genève, Slatkine, 1972. (Paris, 1661.).

Tallemant des Réaux; *Les Historiettes I.*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1990 (premier dépôt légal: 1960).

Tallemant des Réaux, *Les Historiettes II.*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1980.
Voltaire; *Le siècle de Louis XIV*, dans *Œuvres historiques*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1987. (丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』、岩波書店、1958年)

Voiture, Vincent; *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, 2 vols., Paris, Librairie Marcel Didier, 1971.

Voiture, Vincent & Costar, Pierre de; *Les entretiens de M. de Voiture et M. de Costar*, Genève, Slatkine, 1972, (Paris, 1655, Fac. sim.)

Voiture, Vincent; *Œuvres de Voiture*, 2 vols., Lettres et poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Uccini, Genève, Slatkine, 1967. (Paris, 1855).

川田靖子 『十七世紀フランスのサロン』、大修館書店、1990年

田島俊郎 「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第1巻、1990年

田島俊郎 「ジュリーへの手紙 -ヴォワチュールの反語-」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第2巻、1991年

田島俊郎 「ヴォワチュールのロンド注解」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第4巻、1993年